

令和元年 7 月 5 日

報道各社 各位

大学共同利用機関法人 自然科学研究機構

第 17 回 自然科学研究機構 小森 彰夫 機構長プレス懇談会開催のご案内

拝啓

時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。プレスの皆様におかれましては、平素より格別のご高配を賜り、心よりお礼申し上げます。

自然科学研究機構（NINS）では、機構長のリーダーシップの下、情報発信の強化の一環として機構長主催のプレス関係者限定懇談会を定期開催しています。今回私たちは、令和元年最初の懇談会となる第 17 回懇談会のテーマを「**ブラックホール研究最前線！天文学の基礎と将来の展望**」とし、私たちのグループのひとつである国立天文台の最先端研究を皆様へご紹介する機会とさせていただきます。

さかのぼること 3 ヶ月前の 4 月 10 日、国立天文台をはじめとした国際研究チームが、世界で初めてブラックホールの撮影に成功しました。この人類史に残る衝撃的な研究成果の意味と今後の展望について、本プロジェクトにおける日本の主要研究者である本間希樹教授を招聘し、ご講演をいただきます。また本講演に先立ち、いつも当研究機構の研究成果に御注目いただいている記者様をはじめ、サイエンスライターの皆様へより一層深く天文学を知っていただくべく、電波天文学のレクチャーを合わせて開催させていただきます。

参加を希望される場合は、別紙の返信用紙¹に必要事項を記入し、NINS 企画連携課まで E メール（nins-kikakurenkei@nins.jp）または FAX（03-5425-2049）にてお申し込みください。

締め切り：7 月 17 日（水）17:00 必着

ご多忙のところ大変恐縮ではございますが、皆様のご参加を心よりお待ちしております。

敬具

¹ 返信用紙は次の URL からダウンロードすることもできます。

URL： <https://www.nins.jp/site/connection/pressconf17.html>

記

日 時：令和元年7月19日（金） 16時から2時間程度

場 所：大学共同利用機関法人 自然科学研究機構事務局会議室

〒105-0001 東京都港区虎ノ門4-3-13 ヒューリック神谷町ビル2階

テーマ：

ブラックホール研究最前線！天文学の基礎と将来の展望

内 容：

1. 機構長挨拶

小森 彰夫（自然科学研究機構 機構長）

2. 話題提供

（1）平松正顕（自然科学研究機構 国立天文台 助教）

「見えないものを見る 電波天文学」（講演時間 1 時間）

（2）本間希樹（自然科学研究機構 国立天文台 教授）

「人類が初めて目にしたブラックホールの姿」（講演時間 1 時間）

※プログラムは予定であり、当日内容変更する場合があります。

※話題提供の終了後、質疑応答の時間を多くとるため、意見交換会（会費 1,000 円程度）を予定しております。皆様ぜひご参加ください。

<懇談会についてのお問い合わせ先>

大学共同利用機関法人 自然科学研究機構（NINS）

研究力強化推進本部 坂本 貴 和 子

事務局 企画連携課 奈良 拓 真

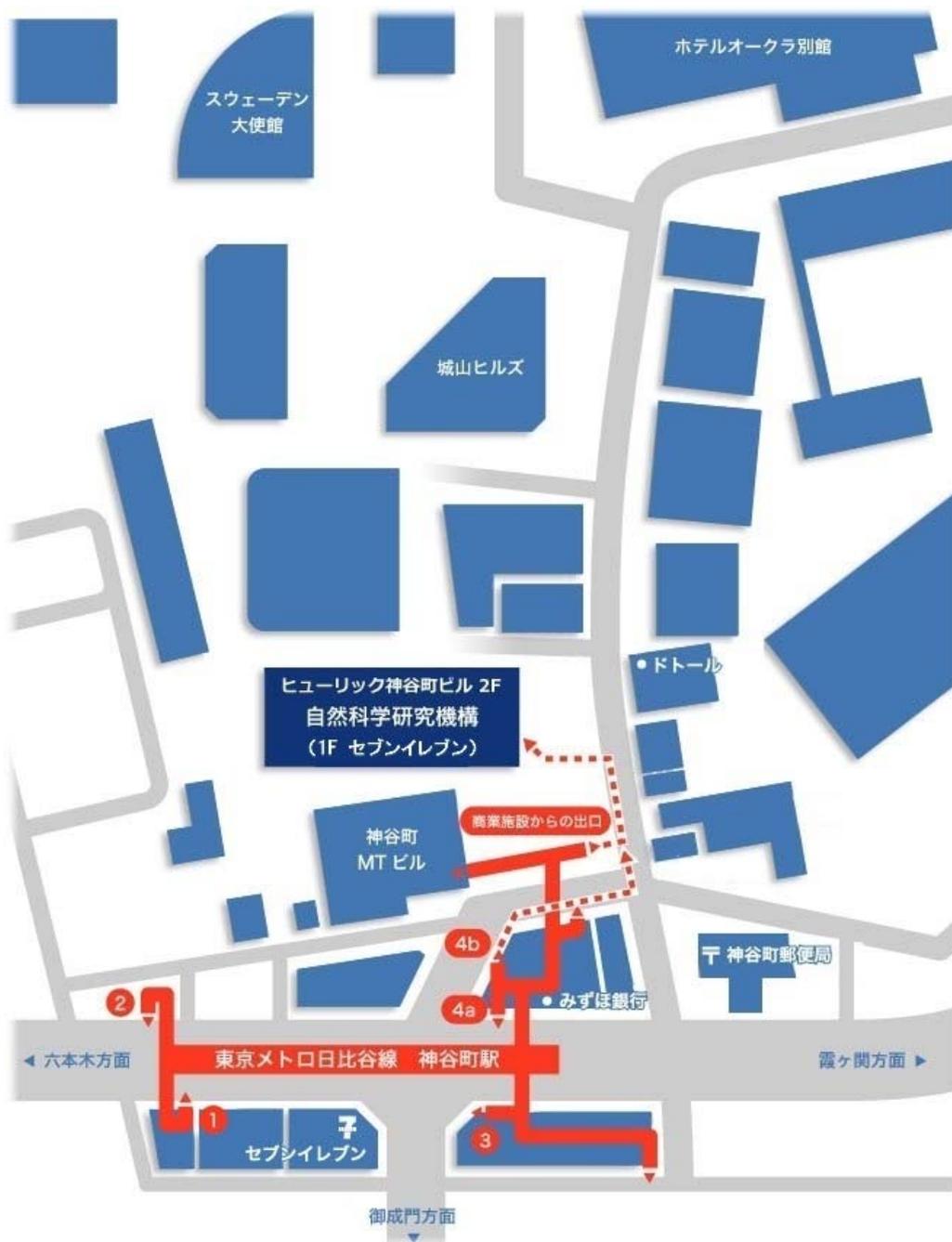
電話：03-5425-1898 FAX：03-5425-2049

E-mail：k.sakamoto@nins.jp [広報担当：坂本]

nins-kikakurenkei@nins.jp [企画連携課]

会場地図：自然科学研究機構事務局会議室

〒105-0001 東京都港区虎ノ門4-3-13 ヒューリック神谷町ビル2階



- アクセス
- ・東京メトロ日比谷線 神谷町駅 4 b 番出口より徒歩2分
 - 右手の信号をホテルオークラ方面に向かってお進み下さい。
 - 左手のロータリーがあるビルの2階に事務局があります。
 - ビルの受付にて入館カードをお受け取りいただき、ゲートを通過し左手のエレベーターで2階にお上がりください。

【講演 1】

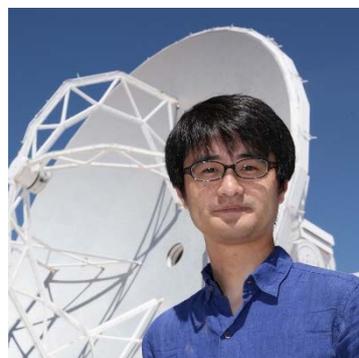
「見えないものを見る 電波天文学」

講演者

平松 正顕 (ひらまつ まさあき)

自然科学研究機構 国立天文台

台長特別補佐・アルマプロジェクト 助教, 博士 (理学)



昭和 55 年岡山県生まれ。東京大学大学院理学系研究科天文学専攻博士課程を修了後、台湾中央研究院天文及天文物理研究所 博士研究員/ALMA 地域センターアストロノマーを経て平成 23 年 3 月に国立天文台チリ観測所助教に着任。専門は電波天文学、星形成の観測的研究。

電波望遠鏡を用い、太陽のような星や惑星の誕生過程を探っている。特に、星の重さがどのように決まり、そのまわりにどのような惑星系が作られていくのかということに興味を持っている。またアルマ望遠鏡の広報担当として、講演や執筆活動を精力的に行っている。

要 旨

ブラックホール撮影に使われた電波望遠鏡は、人間の目や一般的な望遠鏡ではとらえることのできない電波をキャッチすることで、「見えない宇宙」の謎を解き明かしています。電波望遠鏡が観測するのは、ふつうの星たちではなく、星々の間に漂うガスや塵（星間物質）です。星間物質は星や惑星の材料であるため、これを調べることは星や惑星の成り立ちを知ること、つまり私たちのルーツを探究することにつながります。また電波は、ブラックホールや宇宙のはじまりという極限環境で何が起きているのかを教えてくれるメッセンジャーでもあります。宇宙からやってくる電波に人類が初めて気づいてからおよそ 90 年、電波天文学は大きく発展してきました。現在では、日本も参加する国際協力の電波望遠鏡「アルマ望遠鏡」が、銀河や惑星の誕生について教科書を書き換えるような成果を次々と挙げています。

本講演では、電波天文学の基礎と最新成果を改めてご紹介するとともに、電波天文学のこれまでとこれからを概観します。

【講演2】

「人類が初めて目にしたブラックホールの姿」

講演者

本間 希樹 (ほんま まれき)

自然科学研究機構 国立天文台

水沢 VLBI 観測所 教授, 博士 (理学)



平成6年東京大学理学部天文学科卒、平成11年同大学院博士課程修了。同年国立天文台 COE 研究員。その後、助教、准教授を経て平成27年より国立天文台教授、水沢 VLBI 観測所所長を兼務。専門は超長基線電波干渉計 (VLBI) を用いた電波天文学で、国立天文台の VERA を用いた銀河系構造の研究や、国際共同プロジェクトであるイベント・ホライズン・テレスコープを用いた巨大ブラックホールの研究等を主に行っている。著書に『巨大ブラックホールの謎』(講談社ブルーバックス) など。平成29年よりNHKラジオ『子ども科学電話相談』の回答者も務めている。

要旨

平成31年4月、人類が初めて目にした「ブラックホールの影」の写真が公開されました。この写真は、イベント・ホライズン・テレスコープ (EHT) という国際共同研究プロジェクトが撮影したものであり、観測は世界6か所8台の電波望遠鏡を組み合わせ、VLBI (超長基線電波干渉法) の手法により得られたものです。写真にはドーナツのような構造が写っており、輪の中心の暗い領域がブラックホールの影であり、ブラックホールが「光さえ脱出できない暗黒の天体」であることを視覚的に表しています。

本講演では、今回得られた「ブラックホールの影」の写真について、何がみえたのか、どのような科学的意義があるのか、また、どのようにして撮影されたのか、などについて解説します。また、ブラックホール研究の今後の展望についても述べたいと思います。